

B02 「伝承と受容(日本)」

B02 近代日本における西洋古典文化の受容と教養文化の変容に関する歴史社会学的研究

研究代表者 筒井 清忠
京都大学大学院文学研究科 教授

研究分担者 田中 紀行
京都大学文学研究科 助教授

研究目的

- ①本研究の目的は、明治期以降の日本社会に輸入された西洋の古典文化が、近代日本の教養文化に組み込まれていく過程を、主として社会的・制度的側面から、歴史社会学的に解明することである。
- ②本研究は、西洋の古典文化の受容と近代日本の教養文化の変容との連関、あるいは近代日本における西洋古典の社会的な意味・機能の変化を社会学的分析を通して明らかにしようとすることにより、古典学に新しい分野を開拓する可能性を持つものである。
- ③明治から昭和初期における西洋古典文化の受容という問題に対し、その社会的な意味や文脈を重視して歴史社会学的な視点からアプローチする本研究の試みは、従来の西洋文化受容史研究にはあまり前例のないものである。
- ④本研究代表者は、近代日本の教養主義に関する研究を長年手掛けており、平成9・10年度の科学研究費基盤研究(C)「近代日本における文化接触と階層文化形成の動態に関する歴史社会学的研究」では、外来文化の選択的受容と階層文化形成の関係を歴史社会学的見地から解明している。

研究計画・方法

まず第一に、異文化受容に関する歴史社会学・文化社会学の先行研究を検討し、有効な分析視角を導き出す。第二に、近代日本における、教養文化への西洋古典文化の包摂プロセス及びその過程で高等教育と出版文化が果たした機能を、統計・文献史料等を用いて分析する。第三に、近代日本の教養文化における、西洋古典文化と漢学・国学との相対的な位置関係を、明治から昭和戦前期にかけての出版状況に関する統計や、当時の新聞・雑誌記事などから分析する。

以上のような研究を実行するには、多量の文献史料が必要であるが、京都大学の所蔵する資料だけでは不十分なため、購入または複写という形での入手作業が不可欠である。また資料収集のための出張が多くなると予想されるため、研究経費のうち旅費の比率を高くした。研究の分担予定としては、研究代表者の筒井が研究の総括及び出版文化における西洋古典の受容に関する分析、分担

者の田中が高等教育における古典の制度化に関する研究を行う。

B02 禅林聯句に関する基礎的研究

研究代表者 朝倉 尚
広島大学総合科学学部 教授

研究目的

研究項目・B02に期待・要請されているところの一つは、いまだ研究が十分でない室町時の五山文学の分野において、外国文化がどのような形で日本文化に影響を及ぼしたかの解明である。本研究はこの要請に添ったものである。禅林聯句は未開拓ながら、五山文学の主要文学形態の一つである。内容面における、禅的な発想を基盤とした価値の転換、表現面における、観念的世界の展開による博引傍証の実態の検討は、主として中国文化の伝承と受容、さらに日本的発展への筋道の解明に直結する。

④については、平成6～8年度科研(研究分担者として)で景徐周麟の文筆活動の一端を明らかにした。

研究計画・方法

11年度は、主として各地の寺院や諸機関に点在する禅林聯句の作品をリスト・アップし、これを収集して整理する。所在と保存の状況を実地に確認した上で、複写可能なものはこれを依頼し、寺院を中心として写真撮影しか認められないものについては、当地に出向いて撮影する。次いで、「江東避乱聯句」(仮称。三〇巻)の精確なテキスト作成と現代語訳の準備作業に入る。使用目的に適する原稿用紙を工夫して準備し、さらには注釈や現代語訳に必要な、本朝の各種抄物、さらには主として中国の漢籍や禅籍を整備する必要がある。

B02 「大航海時代の語学書」としてのキリシタン文献 インド・コニカ語諸文献との対比を中心にして

研究代表者 丸山 徹
南山大学文学部 教授

研究目的

フランシスコ・ザビエルが来朝した1549年より約100年間の「キリシタン時代」、日本の布教に携ったカトリック宣教師たちは日本語ポルトガル語辞書、日本語文法書、文学書、宗教書などを精力的に編纂した。こうした

キリシタン文献は成立事情や刊行年次がほぼ明らかにならなっていて、外国語原典との比較もできるものが少なくないので、日本語史研究資料として高い価値を有するとされている。事実、これまで何人もの国語学者がキリシタン資料の研究に携り、数々の成果をあげてきた。

「キリシタン文献」には少なくとも次の三つの角度から光を当ててみる必要がある。

1. (16・17世紀の)ラテン語・ポルトガル語学書成立の背景

2. 同時代のアフリカ・ブラジル・インド、そして日本における(ポルトガル語で書かれた)現地語文法書・辞書成立の背景

3. 中世日本語の姿

これまで日本においては主として上記3の観点から研究がすすめられてきたが、こうした語学書が、同時代のヨーロッパにおける語学書の構成に倣って(世界各地の現地語について)書かれているからには、上記1, 2の観点を研究に導入することは不可欠である。一方、外国、主としてヨーロッパにおいては、上記1の研究が独立した形で進められ、その中では数々の成果があがっている。本研究はそうしたヨーロッパ・日本における研究成果を土台として、(16・17世紀の)ポルトガルにおけるラテン語・ポルトガル語研究史を縦軸に、同時代のアフリカ・ブラジル・インドにおける現地語文法書・辞書成立史を横軸にとり、日本における「キリシタン文献」語学書の性格を明らかにしようとするものである。今回はその中でも特に、インド・コンカニ語文法書を中心に考察を進め、それとの対比の中で、日本の「キリシタン文献」に光を当てる。

かで成立した古典古代であったことを解明したい。広く日唐の律令法の比較研究を行うが、研究の遅れている以下の2点に重点をおく。

1) 龍谷大学所蔵のトゥルフアン将来大谷文書、及びソウルや中国にあるトゥルフアン文書を調査研究し、特に土地制度関係の膨大な帳簿類の復原を行い、唐西州における律令制の実態を解明し、日本の地方行政や土地制度との相違を考え、日本律令法の特質を明らかにする。

2) 中国国制の一部である礼は、律令法導入時の日本においては継受されず、8世紀半ばから9世紀にかけて受容される。この礼の継受という視点から、宮廷儀礼を捉え直し、9-10世紀に作られた儀式書について写本研究と内容分析を行い、平安時代の儀式や格式法を唐制受容の側面から再評価する。

研究計画・方法

研究経費としての旅費を得て、龍谷大学所蔵トゥルフアン将来大谷文書の土地制度関係文書を中心に、調査研究をすすめ、ソウル韓国中央博物館に所蔵される関連文書の調査を許可をとって行き、唐代の国家財政に関する新事実を解明する。大谷文書については、文書に見える人名・地名などのデータを整理して、中国にあるトゥルフアン文書との対応関係を検討して、復原の手がかりを求め、唐西州における律令制の実態を解明を目指す。この作業にはパソコンを使用し、データ入力にあたっては、謝金支出による協力を依頼する。ただし大谷文書は研究が遅れているため、索引作成より前に本文の確定が第一であり、文書の断片の接合作業が重要となるが、原文書による調査には、破損や傷みの恐れがあって、限界があるので、写真焼き付けの頒布を龍谷大学から受けたい。

B02 日本における唐律令・礼の継受と展開

研究代表者 大津 透
東京大学大学院人文社会系研究科 助教授

研究目的

本研究は、日本の古典文化の特質を探るため、日本古代の国制の枠組みである律令制の性格を解明することを目的とする。

律令法は、中国・唐の法典を輸入した継受法であるが、唐法をかなり変更しており、唐制との比較研究により、日本固有の土俗的・民族的なあり方を掘り出したい。一方で礼を含めて中国国制の継受は8・9世紀を通じて続き、10世紀以降の撰録時代が、中国文化の強い影響のな

B02 古代・中世の漢文訓読文資料の文体的研究

研究代表者 金水 敏
大阪大学大学院文学研究科 助教授

研究分担者 李 長波
京都大学京都大学大学院人間環境学研究科 助手

研究目的

本研究では、古代・中世の漢文訓読文がどのように展開し、和漢混淆文や言文一致文へと繋がっていくかという問題を、具体的に探求していく。現在までに、中古・中世の漢文訓読法や訓読文特有の語彙・語法の展開と伝承という面から研究が進められ、大きな成果を上げているが、さらに大きなスパンでの通時的文体論へと結びつ

けるような研究は未だに現れていない。本研究はその点で、文体史的研究の中に漢文訓読資料を位置づけるといふ新しいタイプの研究であると言える。このような考察は、日本の古典の基礎的なバックボーンを検証するという意味で、本特定領域研究にとってもきわめて重要であると考えられる。

なお、研究代表者は、永年、中古・中世の寺院経蔵の实地調査に携わりながら、文法史研究の観点から漢文訓読文資料を取り扱い、さらにパーソナル・コンピュータによる古典籍の組版について研究してきた。研究分担者は、近世における日本人の漢文受容の一端について研究を進めてきている。

研究計画・方法

- 1 中古・中世の漢文訓読文（漢籍・仏典）を中心に、関連する文体（和化漢文、宣命体、仮名交じり文、仏典講義録、和漢混淆文等）についての従来の研究を網羅し、書誌情報と研究内容をデータベース化する。
- 2 1のデータベースをもとに、語彙、構文、訓法、文章構成法等の区分をほどこした文体的指標を抽出する。
- 3 上記の文体的指標を軸に、中古・中世の漢文訓読文を中心とした文体形成・発展史の構想を策定する。
- 4 関連する研究を行っている研究者を招いての合同研究発表会を年間2回程度行い、情報交換に努める。
- 5 平行して、漢文訓読資料の实地調査を行い、第一次資料の蓄積を図る。

B02 古典和歌データベースにおける表現技法の歴史的研究

研究代表者 南里 一郎
純真女子短期大学国文科 講師

研究分担者 竹田 正幸
九州大学大学院システム情報科学科 助教授

研究目的

和歌は、1300年の歴史を通じて、常に日本文学の中心であった。このため、和歌文学の研究は、その歴史の分だけ重ねられてきた。しかし、従来の研究は、歌語、すなわち自立語のみに偏ったものであって、自立語と自立語をつなぎ、一首の和歌にまとめあげるといふ、重要な役目を担う付属語が、ここでは全く度外視されていた。これからの和歌研究は、付属語を中心とするパターンの解析にかかっているといても過言ではない。そこで、研究代表者らは、付属語のなすパターンを計算機によって自動抽出する研究を行った。これによって、歌集ごと

の特徴、歌人ごとの詠みぶりの差異、および時代の好尚を獲得できることが明らかとなり、和歌文学研究に、新しい方向性を与えることができた。

本研究は、万葉時代から江戸時代におよぶ、古典和歌45万首を網羅した『新編国歌大観』を対象に、計算機による表現技法上の特徴の自動抽出を確立し、これに基づいて表現技法に関する歴史的な分析を行う。この作業を通じて、和歌における表現技法の歴史的変遷や、時代による好尚を明らかにする。すなわち、本研究は、和歌文学研究の分野に点在する、個別の歌人に焦点を絞った研究に対し、これらを有機的に結合し、統合する巨視的な視点を与えるものである。

研究計画・方法

- (1) 計算機による和歌の表現技法の自動抽出のために、これまでの研究成果と経験を一般化して、「表現技法」の定式化を行う。
- (2) (1)の定式化に基づき、表現技法を自動抽出するアルゴリズムを開発し、これを計算機上に実現する。
- (3) (2)のアルゴリズムを、和歌文学作品に適用し、表現技法を抽出する。
- (4) (3)で得られた結果を、歴史的視点から分析を行う。

B02 近衛家熙考訂本『大唐六典』の研究

研究代表者 礪波 護
京都大学文学研究科 教授

研究目的

唐以前における中国の行政機構と官僚制を考察するに当たって最も有用な書は、唐の玄宗の御撰で、勅を奉じて李林甫らが注を書いた、『大唐六典』30巻である。本書の信頼できる最良のテキストは、わが京都で1724（享保9）年に前太政大臣の近衛家熙が考訂出版した、いわゆる近衛本なのである。新井白石から贈られた写本に書き加えつづけた家熙の稿本が数年前に再発見され、さきごろ私自身が確認しえたので、家熙考訂本『大唐六典』の成立過程を綿密に跡付けるのを目的とする本研究を開始したい。

研究計画・方法

近衛家熙考訂本『大唐六典』全巻に対して句読・訓点および書き入れをした広池千九郎（1866～1938年）の成果は、内田智雄による補訂をともなって、1973年に広池学園事業部より出版されて、広池本と呼ばれている。と

ころが句読や書き入れに妥当でない箇所が散見される。
そこで、11年度においては、京都大学に所蔵される政書
などを参照しつつ、広池本における疑問点を一つずつ吟
味する。その際に、東京の内閣文庫などに秘蔵される漢
籍を閲覧して完璧を期す。

B03「近代社会と古典」

採択なし